

2012 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、**HB**の鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

— 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(50点)

我々は日常生活の中でいろいろな複雑な情報にさらされているが、それらが相互に矛盾することは珍しくない。愛煙家を例に取ろう。タバコが健康に悪いことはよく知っている。しかしタバコはやめられない。ここには「タバコが健康を害する」という認識と、「私はタバコを吸い続ける」というもう一つの認識とが拮抗^{きうかう}している。このような認知的に矛盾した状態は不快感をともなう心理的緊張をもよおすので、人はできるだけこのような状態を緩和しようとする。そのために拮抗状態にある情報のどれかを変更するか、他の情報をつけ加えることによって少しでも矛盾を軽減しようとする。この場合では例えば、「タバコを吸うと癌^{がん}になると言うが、現代生活は危険だからだからタバコだけやめたって意味がない」とか、「私の父は相当な愛煙家だったが八〇歳すぎまで生きた。うちは長寿の家系だから心配ない」などという理由を持ち出せばよい。このように情報の間に矛盾があるとき、矛盾を減らすような認知変化が無意識的に生じる事実が多くの研究によって確認されている。例を挙げて具体的に説明しよう。

一九六〇年代のこと、アメリカ合衆国の大学で学生紛争が起こり、それを鎮圧するために警察介入が起きた。この事件が契機となり、警察権力の介入に対抗して大学自治を守ろうという雰囲気^{ふんいき}が学生のほとんどに広がっていたが、そんな状況の中で次の実験が実施された。「今回の事件に対する学生の考えをよく理解して大学生活をより充実させるために調査をしているが、それには警察介入に賛成と反対の両方の意見を広く求める必要がある」という口実の下に、被験者である学生に対して、「あなた自身の意見とは別に、警察介入賛成の人たちの理由を想像してできるだけ説得力ある文章を書いていただきたい」と依頼した。参加の手間賃をいくらか支払うことを約束し、警察介入を⁽¹⁾シヨウレイする文章を書いてもらった。そして最後に被験者自身の意見を尋ねた。

実はいくつかの実験状況が想定してあり、条件によって手間賃の金額が異なる。どの条件の被験者たちも警察介入に対して反対であり、したがって自分自身の信条と相いれない意見を支持する行為(警察介入を求める意見書の作成)をしたことについて

はかわりない。しかしそのために受けとる報酬が条件によって異なるという設定だ。常識で考えれば、もらう金額が高ければ高いほど、そのためにした行為に肯定的な意見を見いだすので、少額を受け取った被験者に比べて、多額の報酬を受け取った被験者は警察介入を認める方向に影響されやすいことが予想される。

しかし先に述べた認知的整合性の観点からみると、これとまったく反対の傾向が現れなければならない。すなわち、「自分は警察介入に反対だ」という認識と、「警察介入を擁護する文章を書いた」という認識とはお互いに矛盾している。ところがそのためにたくさんのお金をもらったのなら別に矛盾でも何でもなくなる。嫌なことや自分の信条に反することでも、お金を稼ぐためには仕方なしにやるといふ状況は日常茶飯事だ。したがって金額が高くなればなるほど、自分の本心にそぐわない意見を述べた事実から発生する認知的矛盾の度合いは小さくなる。逆にほんの少額しかもらわなかったのに嫌なことをしたという認識においては矛盾が大きい。そこでこの矛盾を緩和させるために、「警察介入はいけな思っていたけど、よく考えてみると紛争を取り締まることも必要だし、民主主義を守るためにもやはり秩序を維持する最小限度の装置は必要だ」などと警察介入を正当化する方向に意見修正するだろうという予測が立てられる。そして実験結果はまさにその通りになっている。

もっと身近な分野、例えば食べ物の嗜好しこうなどに関しても研究がなされている。バッタ数匹の焼き物を並べた皿を被験者の前に出して、「無理にとは言わないが」と念押ししながらも、全部でなくていいから試しに一匹でも食べるように勧めた。約半分の被験者は尻込みしたが残りの半分は勇気をふるって実験者の勧めに従うことに決めた。さてここが実験のミソだが、実は一つの条件においては実験者が非常に優しい人だという印象を被験者に持たせるようにし、もう一つの条件下では実験者が意地悪で嫌な人間に見えるような細工を施した。

どちらの条件において、被験者はバッタをより美味しい（思ったほどは気持ち悪くない）と感ずるだろうか。好きな人のためならかなりのギセイ(2)を払うことも厭いとわないが、嫌な人のためには何の努力もしたくないのが人情。バッタを食べるのは気味の悪い経験だけれども、優しい実験者の頼みならば、彼に喜んでもらえるならばその努力のしがいもある。ところが反対に嫌いな人のためにであれば、どうして不味いものを無理して食べなければならぬのか、なぜこんな人のために苦勞するのか自分ながら

理解に苦しむに違いない。したがって嫌悪感を覚える実験者に請われてバッタを食べた場合の方が、好意を持つ実験者に依頼されて食べた場合に比べて認知上の矛盾が大きい。とすればバッタを味見したという事実は動かせない以上、矛盾を緩和するためには結局、バッタが思っていたほど不味くはなかったと思ひこむ他はない。したがって意地悪な実験者の条件の方がバッタの味の印象が向上するという、常識に真つ向から対立する予想が立てられる。そして実験結果は実際その通りになっている。

ところでここで重要な疑問がわく。これらの実験に共通するのは、普通ならば行わないはずの行為を何らかの口実の下に被験者に行わせるという状況だ。気持ちの悪い昆虫を試食させたり、自らの信条に明らかに反する声明文を書かせたり、あるいは電気ショックを自らに課すという不快な体験をさせる場合もある。しかしよく考えてみると、⁽³⁾このような面白くもない行為をそもそもなぜ被験者は受け入れるのだろうか。

自らの信条・道徳・欲望に反する行為を自らの意志で行ったという認識がなければ認知上の矛盾は生じない。したがってどの実験においても、何らかの不快な行為をなす要請をした後に、「もちろん、するかしんかはおあなたのご自由です。もし嫌なら仕方ありません。強制はできませんから」などと必ず確認をしている。つまり、正当な理由もないのに被験者はしたくない行為を自由意志の下に行うという、まさしく形容矛盾としか言えないような状況が生じている。この理論をめぐってなされた実証研究はおびただしい数に上っているが、研究者の要請を拒否する被験者は非常に少ない。バッタを食べさせる実験でさえも、参加者の半分以上が強制されることなく自主的に、それまで口に入れることなど想像もしなかった昆虫の試食を⁽⁴⁾ショウダクし実際に食べて見せている。何故このようなことが起こりうるのか。

この謎はしかし簡単に解くことができる。実は、被験者が行為をなすのは決して自由意志などによるのではない。自ら主体的に選択したと思っても、我々は知らず知らずのうちに外界からの情報に影響を受けて判断や行動をしている。しかし「嫌ならしいんですよ。強制する気はまったくありませんから」などと言われるために、本当は外的強制力が原因で引きだされた行為であるのに、その事実が隠蔽^{いんぺい}され、あなたも自ら選び取った行為であるかのごとく錯覚してしまう。この錯覚がなければ矛盾した心的状況は初めから起こりえない。ここには自由意志などはない。あるのは自由の虚構だけである。

この論理を押し進めると、自律した個人主義者ほど影響されやすいという、常識に反する結論が導き出される。

(5)。しかし心理機構の原理からしてそんな人間は実際にはあり得ないので、個人主義的とは、外部情報に依存していてもそれに無知である傾向が強いという意味にすぎない。したがって何らかの行為を行った後で「何故このような行動をとったのか」と自問するときに、個人主義的な者ほど自らの心の内部にその原因があったのだろうと内省し、自らの行動により強い責任を感じる傾向が強い。そのために行動と意識との間の矛盾を緩和しようとして無意識的に自らの意見を変更しやすい。合理的な自己像を保とうとする個人主義者こそ合理化^{II}正当化の罠^{わな}に搦め捕られやすく、したがって影響されやすいという逆説的な推論がこのようにして導かれるが、この考えが正しいことは実証研究によりすでに確認されている。また同様な傾向として、自己に自信を持ち、他人に頼らないで自ら判断しようとする者の方が、周りの人の評価を気にしがちな者に比べて矛盾をより強く覚えるために、このような状況におかれると影響されやすいこともわかっている。

強制されている事実⁽⁶⁾に気づかず、自らの意志で行為を選択しているという虚構がかえってこのような影響を可能にしている。被支配者が自らソッセン⁽⁶⁾して正当性を見いだすおかげで支配はその真の姿を隠蔽し、自然法則の如く作用するように、本当は自由の身でないのに自由だという幻想を抱くときにこそ、我々は権力の虜^{とりこ}になってしまうのだ。

近代市民社会を樹立する前提条件として「個」を確立することの必要性が声高に叫ばれてきた。日本人は画一的であり、個性がないというイメージは、外国人から投げ掛けられる非難だけに留まらず、日本人自身が繰り返してきた日本人像だろう。それがまったく根拠のないものだと言うつもりはない。しかし西洋社会に顕著な個人主義的人間観が日本⁽⁷⁾でより普及したとしても、そこから自律的な人間存在が生み出されるわけではない。

個人の責任をもつと明確にする社会を作らなければならないとか、まわりに流されるのではなく自らの独立した意志で行為する人間を育むべきであるなどと日本人が自己批判するとき、その理想像として暗に西洋人がモデルになっている。しかし、人間は誰でも簡単に他者に影響されるという事実を証明するデータのほとんどすべてが、まさに西洋人を被験者として得られたものだという点がしばしば見落とされている。日本人を西洋的個人主義者に変身させることが仮に可能だとしても、行為や判断を自ら

の意志で決定するような自律的存在は出てこない。

人間は、情報交換を常に行わなければ成立し得ない、外に開かれた存在だ。自己と呼ばれる契機は間主観的にしかありえず、それはどの文化であろうと、またいつの時代であろうとかわりない。歴史的にみれば、自律した個人という自己／他者の概念・表象はヨーロッパにおいて、また近代に入って成立したイデオロギー的産物だ。人間を自律した存在として錯視する傾向は、アジア人やアフリカ人よりも西洋人の方が強いと言ふことはできる。しかしだからといって、西洋人が独立した個人として実際に存在しているわけでは当然ない。そのような独我論的な存在は、日本人を特殊視する「日本人論」⁽⁸⁾が自らのインガとしてその地平線の彼方に投影する蜃気楼にすぎない。

我々は他者そして外部環境によって常に影響されている。しかし今まで述べてきたような巧妙な合理化機能のおかげで自律の感覚も同時に保たれている。自分自身で意志決定を行い、その結果として行為を選び取っていると我々は信じているが、多くの場合、実は原因と結果とが転倒している。人間は (9) 動物というよりも、(10) 動物だという方が実状に合っている。

自律感覚は幻想だからそこから脱却すべきだと主張しているのでは決してない。それどころか反対に、このような自己を欺く機構がうまく機能するおかげで人間の生が可能になっている。考えや記憶を無意識に修正するこの仕組みがなければ、自らの行為・思考・運命を司っているという感覚を我々は持てなくなる。変化を外界から強制されるのではなく、自ら変化を選んでいくというのはたいいていの場合、錯覚にすぎない。しかしこの錯覚がなければ我々はそもそも生きてゆくことができないのである。

(小坂井敏品『民族という虚構』による)

〔問一〕 傍線(1)(2)(4)(6)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(3)「このような面白くもない行為をそもそもなぜ被験者は受け入れるのだろうか」とあるが、この問に対して筆者が出している答えを三〇字以内にまとめて記しなさい。(句読点は一字に数える)

〔問三〕 空欄(5)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A できるだけ多くの人の意見に耳を貸し、そうした意見を総合的に判断した上で行動する、そんな成熟した自律的人格が今の日本では理想とされている

B 人から聞いたことを鵜呑みにせず、何であれ自分で確認していないことは安易に信じない、そんな批判的精神の持主が近代市民社会の自律的主体だと考えられてきた

C 他の人たちの意見もきちんと考慮に入れながら、しかし最後の決断だけは自分で下すことを忘れない、そんな自律的人物が今日では理想とされている

D 一切の外部情報を除外すべく絶えず気を配ることによって、自分の判断に他人の影響が入り込むという事態は避けられる、そう人々は信じてきた

E 他人の意見に流されず自分の頭で考えて判断・行動し、自らの行為に対して責任を持つ、そんな自律的自我像が近代では理想になっている

〔問四〕 傍線(7)「西洋社会に顕著な個人主義的人間観が日本でより普及したとしても、そこから自律的な人間存在が生み出されるわけではない」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 個人主義的な人間観を普及させるためには、自分が自律的な人間であるという錯覚を持つ必要があるから。

B 個人の責任を明確化する必要を説く日本人が、その理想像として暗に西欧人をモデルにしているから。

C 個人主義的な人間観はそもそも錯覚に基づいたものであり、自律的な人間などありえないものだから。

D 西欧人を被験者として得られたデータが、個人主義的人間観が普及し得ないことを証明しているから。

E 個人主義的な人間観は西欧人をモデルとしたものであるので、外部環境に影響され易い日本社会には馴染まないものだから。

〔問五〕 空欄(9)(10)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 理性的 B 矛盾した C 逆説的 D 理性化する E 矛盾しない F 逆説化する

〔問六〕 次の文ア～オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア 健康に悪いと知りながらタバコを吸うのは、外的な強制力によって吸うように仕向けられているのに、自分の意志で吸っていると錯覚しているからである。

イ 認知的な矛盾を減らそうとする心理的な機制は、為政者が国民をコントロールするのに有利に働くものである。

ウ 自律感覚は幻想でしかないのに、そのようなものがなければ生きていけないというのは実に情けないことである。

エ 日本人は西欧人以上に周囲に気を配る傾向があるので、人から強制されたことを自分の意志だと考え易い。

オ 個人が自分の意志に基づいて行動するというのは幻想だが、私たちはその幻想なしに生きていくことはできないので、その幻想を可能な限り現実近づけるべく努力しなければならない。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

こんにち日本語のなかで暦の時間を区切る単位は、日、週、月、年がおもなものである。週の使用はもちろん近代になってからだから(初伝来は十二世紀にまでさかのぼるが)、ヒとツキとトシとが固有のものだ。このうちヒは太陽の、ツキは月のうごきを示していることはいうまでもない。それではトシはどこから来るのか?

トシとは元来、イネのみのりをあらわしていた。人名などで稔という字を、トシとよませるのはそのなごりである。その年の収穫だからイネのみのりをトシとよぶのではない。

このことは中国語でもおなじで、年という文字は元来、穀物を示す禾を頭につけた人物、すなわちみのりの擬人化である。

多くの原始共同体において、現実的な未来の長さが数ヶ月ないし一年の限度であるのも、人間にとって長期の未来への最初の切実な関心をよび起こすのが、農業生産であるからであろう。農耕においてはじめて人間は、相当長い未来に手にしうる結果のために現在の生を手段化するという、ひきのばされた時間性の回路を張りながら生きることになる。

それは近代の工業社会の、抽象的に無限化された時間からみると、トシのイメージにもあるように、なお(3)と(4)を失っていない。けれどもそれは狩猟や採集の時期とくらべると、すでに飛躍的に間接化された(3)である。

予祝という、この時期の日本人の時間意識の構造を凝縮している行為は、このとおい未来の収穫の確実さへの、祈念の切実さということをぬきにしては理解しえない。

予祝とはいうまでもなく、春の農耕の開始に当たって、秋の収穫を予め祝うのである。平野仁啓が『続 古代日本人の精神構造』で論じているように祈年祭とは、まさしくこのように、その一年の労働の意味に他ならない秋の稔りすなわちトシを、春にあらかじめ祝ってなされるミトシハジメに他ならなかった。

この予祝儀礼によって設定される、聖なる時間と俗なる時間とのいわば「平行関係」について、平野はつぎのように書いている。

祈年の祭によって発動したミトシノ神たちの行為は、聖なる時間においてそのまま働きを持続するのである。小正月の予祝儀礼において、半年を越える未来の刈り上げの豊作を表現しておくことは、未来の収穫期にそれが実現することを約束されることである。聖なる時間において実現されたことは、現実に対する規範として影響しつづけるのであって、現実はその模倣する、と信じられたのである。図式的な言い方をすれば、設定された聖なる時間は、俗なる時間と平行して流れている⁽⁵⁾のである。例えば、田の神を、俗なる時間と平行して流れる聖なる時間の神格化された象徴と見立てるならば、この場合の聖なる時間と俗なる時間との在り方がよく理解されるはずである。

すなわちその年のはじめに未来をあらかじめ現在化せしめる儀式が、未だ来ぬトシに向って辛苦しつづける労働の日々をとおして臨在し、〔現在しつづける過去〕⁽⁶⁾の規格をこの未来に与えるのである。くり返しいえば、それはその年の長期にわたって外化された労働の意味に他ならない未来を既定の過去として設定することによって、これを現在しつづけるものとするのだ。

(真木悠介『時間の比較社会学』による)

〔問一〕 空欄(1)に入れるのにもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A むしろ、繰り返されるみのりであるからこそトシとよんだのだ。
- B 反対に、イネのみのりが一度あることをトシとよんだのだ。
- C かえって、その年にえられた収穫そのものをトシとよんだのだ。
- D 逆に、その年限りのみのりであるからこそトシとよんだのだ。
- E じつは、イネのみのりを願うという行為をトシとよんだのだ。

〔問二〕 傍線(2)「ひきのばされた時間性の回路を張りながら生きること」について、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 農耕においては未来に収穫が得られるかどうか不確定であるから、できるだけ労働する時間を引きのばしていくこと。
- B 農業生産ではその時々々の労働に意味づけせずに、未来に収穫という成果を得ることを目的とすること。
- C 短期間で成果を得られる狩猟などと違い、農耕では未来の成果を得るまでに単調な労働の時間を覚悟していくこと。
- D 農業生産では不確定な未来への不安を超克するために、その時期の労働に独自の価値において重要視すること。
- E 農耕ではその時々々の労働をそれだけで考えるのではなく、未来に得られる収穫と関連づけながら考えていくこと。

〔問三〕 空欄(3)(4)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 確実性
- B 抽象性
- C 具体性
- D 完結性
- E 時間性

〔問四〕 傍線(5)「設定された聖なる時間は、俗なる時間と平行して流れている」について、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 日々農民が田において行う労働それ自体が、神の行う聖なる働きの象徴であると考えられていること。
- B 神に豊作を祈ることで、聖なる存在である神が農耕という労働をつかさどる世俗的な存在になること。
- C 祈年の祭で神が実現した豊作が、日々行われる農民の労働の結果としてあらわれること。
- D 刈り上げの豊作を祈るといふ聖なる儀礼のなかに、収穫による利益を求める農民の願望が隠されていること。
- E 祈年の祭では豊かな収穫が約束されているが、実際の収穫は天候など現実の状況に左右されていること。

〔問五〕 傍線(6)「へ現在しつづける過去」の規格をこの未来に与える」について、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 過去の収穫において繰り返し得られた経験が、祭を通して未来の豊作を確実にするために生かされていくこと。
- B 豊作が実現するという祭をあらかじめ行うことで、現在の労働を豊作を実現した過去の労働の再現にすること。
- C 祭をすることで現在の労働の苦勞が過去の労働とつながられ、そのことで過去の豊作も未来につながることに。
- D 豊作の祭をあらかじめ行うことにより、それが日々の労働を意味づけ、未来の豊作の保証にもなること。
- E 過去に行われた祭が豊作を実現したように、現在も祭を行うことで未来において豊作が実現されること。

三 次の文章は、『浜松中納言物語』の一節である。主人公中納言は唐の国にわたり、そこで厚遇を受ける。これを読んで後の問に答えなさい。(30点)

その時、大臣・上達部のむすめありとあるは、「他国のかりそめの人なりとも、かくておはする程、我が家の内に出だし入れ奉りて見ばや。さて子をも生み出でたらば、かばかりいみじき人の名残を留めたらんは、⁽¹⁾えも言はざることなり」と、思ひ願はぬ人なくて、さる用意をしつつ気色とり聞こゆれど、⁽²⁾「わが世にてだに、さやうの事思ひ寄らざりしを、まいて知らぬ世界に、さるふるまひをし出でたらんに、いと便なからんかし。⁽³⁾さだに行きかかりなば、帰らんとせんに、事悪しくなりなんかし」と思ふに、いよいよ動かれぬに、一⁽⁴⁾の後の御父の大臣、あまたが中に五にあたるむすめ、すぐれていみじういつきかしづき給ふが、去年の十月のとせいの紅葉の賀の御幸に見給ひてのち、⁽⁵⁾すずろに臥し沈みなやみて、色かたちも変はりゆくを、一⁽⁶⁾の大臣おほきに驚き嘆きて、修法・読経など騒ぎ給へども、よろしうなるけぢめもなし。

「いかなれば、かくはおはするぞ」と嘆き給ふに、「日本の中納言の琴弾き遊び給はんを見侍らばや。それにや、いささか心地まぎると。そこはかとなく、おどろおどろしく苦しき事は侍らねど、ただ埋もれいたく心地のむつかしきを」と答へ給ふに、父の大臣「まことにかの人を見れば、病ひも止み、命も延びぬべき様し給へる人なり。⁽⁶⁾いとかしこく思し寄りたり。われ迎へ奉らん」とて、花盛りいとおもしろきに、輝くばかりしつ、中納言のおはする高層にまうで給へり。

「国にとりては一⁽⁷⁾の大臣にて、さばかり世の中を我がままになびかし、やんごとなげなる人の、いかで物し給ふにか」と、驚きかしこまり給ふに、「さるべき人々、案内申し侍ること侍んなれど、聞き入れさせ給はざんなりと承るを、をのれが⁽⁸⁾あやしのいほりに、このごろ花おもしろく侍るを、御覽せさせに御迎へに参りたる」とのたまふに、否ぶべきならねば、「いとかしこ⁽⁹⁾う。ただ、召し侍らましに、参りなまし」と、言ふ言ふ引きつくりおはしぬ。

〔浜松中納言物語〕による

注 とせい……唐の地名。 高層……高い建物。

〔問〕 傍線(1)「えも言はざること」、(3)「便なからんかし」、(8)「あやしのいほり」の解釈としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) えも言はざること

- A 少しも苦情が出ないこと
- B 言葉にできないくらいすばらしいこと
- C 言うに足りないくだらないこと
- D とてもひとには言えないこと

(3) 便なからんかし

- A 便りが来ないようにしよう
- B 都合が悪いだろうよ
- C 差し障りがないだろうね
- D 気の毒ではないか

(8) あやしのいほり

- A 驚くほど立派な隠居所
- B おごそかな山荘
- C 人目につかない隠れ家
- D 粗末な仮小屋

〔問二〕 傍線(4)(6)(7)の文法的な説明として、もつとも適當なものを左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- A ラ行四段動詞 B 形容動詞語尾 C 断定の助動詞 D 伝聞の助動詞 E 推定の助動詞

〔問三〕 傍線(2)「わが世にてだに、さやうの事思ひ寄りざりしを」の解釈として、もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 日本にいたときでさえ、どこかに婿入りするようなことは考えもしなかったのに
B わたしが皇位に就いたとしても、大臣のむすめと結婚するとは思いつかないのに
C 自分が統治する日本でさえ、母国に帰るのを許さないなんて想像もできなかったのに
D わたしたち夫婦の間でも、子どもを生んで自分の血筋を残すことなど考えなかったのに
E 自分が結婚していたときでさえ、子どもをおいていなくなるなど思いも寄らないのに

〔問四〕 傍線(5)「すずろに臥し沈みなやみて」とあるが、大臣のむすめがそのようになった理由として、もつとも適當なものを

左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 中納言の琴の音を聞いて心が引かれているのに、会うことができなくてつらいから。
B 中納言と恋をしているのに、彼はやがて日本に帰ってしまうことが悲しいから。
C 中納言を見て恋心を覚えたが、それをかなえることもとどめることもできないから。
D 中納言と結婚したいと思っていたが、競争相手が多くて希望がもてなかったから。
E 中納言と紅葉の賀の御幸で親しくなったのに、中納言はその後会ってくれないから。

〔問五〕 傍線(9)「ただ、召し侍らましに、参りなまし」の解釈として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A みなさんがいろいろとお声がけくださるのだから、素直に参上したらよかったですね
- B もしも、大臣が直接お迎えに来てくださったなら、わたしはきつと参上したことでしょう
- C たとえ、どんな高貴な方がお召しになったとしても、わたしは参上しなかったことでしょう
- D ただ、どんな方でも、わたしをお呼びになったら、わたしは参上したことでしょう
- E ただし、前々から大臣がお呼びになったら、わたしは参上しようと思っていました

